

ブラジルが患う「民主主義を守る」ためのクーデタという病

橘 生子

はじめに

ブラジルのルセフ (Dilma Vana Rousseff 1947-) 大統領 (2011-2016年8月31日) が弾劾により解任された時、クーデタであると非難したのは大統領本人だけではなく、弾劾反対派は同政権支持者に限らず、議会によるクーデタ反対を訴えた。他方、弾劾賛成派は大統領と所属政党である労働者党 (Partido dos Trabalhadores) の「汚職」を理由に辞任を求め、その一部は同国軍部の政治への介入も求めていた。大統領らの関与が疑われたブラジル石油公社汚職事件は未だ捜査中であった。同大統領失職により、ルラ (Luiz Inácio Lula da Silva 1945-) 元大統領 (2003-2011) より13年間続いた左派連立政権が終焉した。

ルセフ大統領弾劾に反対する理由には、国民が直接選んだ大統領を国会議員の判断のみで解任し得る憲法規定への不満も含まれたが、クーデタを繰り返したくないというような経験的な見方こそ重要であったと思われる。ブラジルでは1945年に民主主義が始まって以来、汚職が民主主義を蝕む問題であり続けたと同様、クーデタもしばしば民主主義を不安定化させてきた。同国では「民主主義の維持」を大義としたクーデタが度々画策され、実行された。1964年にはクーデタが長期軍政に道を開いた。ついに1985年に民政移管してからは、クーデタ頻発の政治は克服したと思われていた。

ルセフ大統領弾劾の政治的意義は汚職の全容解明とともに、長期左派政権の功罪が論じられる文脈で総括されていくだろう。本稿は専ら、クーデタ再来を危惧する人々の考えを理解することに焦点を絞りたい。弾劾をクーデタであると非難する根拠について、同国政治史に沿って考察する。本文では、現職大統領の自殺という社会的な衝撃をもたらした1954年のクーデタ未遂事件を皮切りに、1964年のクーデタに至った経緯を振り返る。

なお、1945年から1964年は同国初の民主主義の時代であった。共和制樹立 (1889年) 以降、経済的に有力なサンパウロ州とミナス・ジェライス州のエリートが交互に政権を担当する慣習があり、全国政党はなかった。1930年にリオ・グランデ・ド・スル州出身のヴァルガス (Getúlio Domelles Vargas 1882-1954) が将校らと結託して政権を奪取し、1937年に独裁体制を築いた。ヴァルガスが失脚した1945年、独裁期に重用されたヴァルガス派は社会民主党 (Partido Social Democrático) を、反ヴァルガス派は全国民主同盟 (União Democrática Nacional) を、ヴァルガス自身は故郷リオ・グランデ・ド・スル州に下野してブラジル労働党 (Partido Trabalhista Brasileiro) を結成した。新憲法が1946年に発布され、大統領は直接秘密投票にて選出されることとなり、18歳以上の男女識字者に選挙権が付与された。

1. 1954年のクーデタ未遂

1950年の大統領選挙で圧倒的勝利を収めたヴァルガスは、かつて15年間も大統領を務めた独裁者であった。ヴァルガスはブラジル労働党とサンパウロ州都市部で勢力を増す社会進歩党 (Partido Social Progressista) との連立で出馬し当選した。ブラジル労働党の他にも労働者に立脚した政党が同時期に誕生しており、とりわけ1946年に元サンパウロ執政官 (1938-1941) のパロス (Ademar Pereira de Barros 1901-1969) が立ち上げた社会進歩党の協力なくしてヴァルガス復帰は不可能とさえ思われた (Skidmore 2007:75)。ヴァルガスと次期大統領を狙うパロスとの密約を背景に大統領にヴァルガスが、副大統領に社会進歩党のカフェ・フィーリョ (João Café Filho 1899-1970) が当選した。

ヴァルガスの得票48.7%に対し、反ヴァルガス派を代表する全国民主同盟が大統領に擁立して次点についたゴメス (Eduardo Gomes 1896-1981) 空

将の得票は29.7%と大差がついた (Skidmore 2007: 79)。同空将は、コパカパーナ要塞の反乱 (1922年) で生き残った伝説の将校であった。将校らは度々、エリート支配や腐敗政治に結びつく軍上層部を批判して反乱を起こした。

民主主義の時代に独裁者が再び咲いた背景には、独裁期にヴァルガスが作り上げたナショナリズムの制度化があった。深刻な国際収支赤字を背景に、輸入品の国内生産による代替と基幹産業育成に乗り出した (Fausto 1999: 219)。地下資源や基幹産業の国有化を目指し、国营製鉄会社 (CSN) など多くの公企業を設立してエリートや企業家、軍部、官僚、都市労働者らの結束を試みた。また労働法制定や、労働省監督下の労働組合設立、最低賃金制度導入 (1940年) などにより、増加傾向にある都市労働者を取り込んだ。弾圧といった非人道的手段を容認した独裁者であったにも関わらず、社会立法に取り組むことで「貧者の父 (Father of the Poor)」という印象を国民に植え付けた (Rose 2000: xvi)。

1951年に大統領に就任するとヴァルガスは再びナショナリズム色の濃い政策であらゆる勢力間の調整に努めたが、インフレ悪化や国際収支赤字で政権運営は困難を極めた。そもそもヴァルガスのナショナリズムの政策に対立していた輸出向け農業部門や輸入業者、伝統的な中間層、軍部内保守派の不満が高まったことに加え、インフレにより賃上げが単純には実質賃金上昇をもたらさないことで労働者にも不満が生じ、ストが多発した。労働運動の自由化と生活費高騰が同時発生したことで、政府が労働者の動きを完全に掌握することはできなくなった (Fausto 1999: 246)。

1953年6月、ヴァルガスが同郷で大農園主のゴラール (João Belchior Marques Goulart 1919-1976) 連邦下院議員を労働大臣に任命したことで勢力間の緊張が高まった。1952年よりブラジル労働党の党首を務めヴァルガスの後継者と目されるゴラールは、インフレ悪化を背景に最低賃金を倍増させる提案をした (Skidmore 2007: 129)。大佐42人と少佐39人が署名した覚書を通じて最低賃金引き上げに対する軍部の反発を感じたヴァルガスは、1954年2月にゴラール労相を解任する。覚書にはゴラール労相や組合主義者への直接的非難はなかったが、

非熟練労働者の賃金倍増の可能性を背景とした軍人の社会的地位の相対的低下に関する将校らの不満が綴られていた (Skidmore 2007: 128-129)。

各方面から政権への不満が噴出する中、反ヴァルガス派は大統領弾劾を試みるが、議会は未だヴァルガス支持が強かったため、つまり反ヴァルガス派の全国民主同盟にヴァルガス派で議会第一党の社会民主党が協力しなかったために頓挫した (Skidmore 2007: 133)。

しかし1954年8月5日、ヴァルガス批判の急先鋒であったジャーナリストのラセルダ (Carlos Frederico Werneck de Lacerda 1914-1977) に対して大統領警護隊長が差し向けた暗殺者がラセルダを護衛中の空軍少佐を誤って銃殺してしまう事件が発生し、ヴァルガスは窮地に立たされる。同月23日に大統領辞任を求める陸軍将官27人の声明が発表されると、翌24日の朝にヴァルガスは大統領官邸で自殺した。国内外の対抗勢力を告発するヴァルガスの遺書では、生前に演説でよく用いられていた労働者を意味する語 (trabalhador) が1回しか用いられていないのに対し、民衆ないし国民を意味する語 (povo) は10回も使われた (住田 2011: 125)。毎年8月24日は現在でも国を挙げてヴァルガスを追悼する日であり続けている。

ヴァルガスは軍部のクーデタを成功させないために自殺し、「民主主義を守る」ために自らを犠牲にしたという印象を残すことに成功した。「貧者の父」の殉教という印象は、ヴァルガス政治の後継者ゴラールらによって新たな目標達成のため政治的に活用されていく。

2. 1955年のクーデタ

ヴァルガスの自殺に激怒した民衆デモを前に軍部は政権を奪取することができず、カフェ・フィーリョ副大統領が直ちに昇格した。彼は故郷の北東部では低賃金労働者の弁護人として支配階級に対峙し、ストのリーダーとして何度か投獄された経験があり、またプロテスタントの立場から離婚容認姿勢を取って保守勢力を代表するカトリック教会に疎まれた人物でもあった (Keller: インターネット資料)。閣僚からの支持を完全に失ったヴァルガスに対し、カフェ・フィーリョは共に辞任すべ

きと説得にあたったがヴァルガスは自死を選んだ (Café Filho 1966: 336-340)。大統領自殺を巡る混乱の中、閣僚にあえて反ヴァルガス派の政治家や軍人、知識人を中心に選んだカフェ・フィーリョの狙いは、予定通りに次期大統領選挙を実施することにあった (Skidmore 2007: 143-144)。

1955年10月3日に無事に実施された選挙では、社会民主党より出馬したクビシェッキ (Juscelino Kubitschek de Oliveira 1902-1976) ミナス・ジェライス州知事 (1951-1955) が大統領に、ブラジル労働党より出馬したゴラル元労相が副大統領に当選した。つい一年前に労相を辞任に追い込んだゴラルが今度は副大統領に当選したことで、反ヴァルガス派は来年1月末に予定される両者の就任を阻止しようとクーデタを画策し始める (Skidmore 2007: 145-154)。

1955年11月3日、カフェ・フィーリョ大統領が心臓発作に襲われ、一時的に代理を必要としたことで再び危機的状況に陥る。憲法規定に沿ってルス (Carlos Coimbra da Luz 1894-1961) 連邦下院議長が同月8日に大統領に就任したが、次期正副大統領就任に反対する勢力と結託していると非難を受け、わずか3日間で議会に解任された。次にラモス (Nereu de Oliveira Ramos 1888-1958) 連邦上院議長が大統領に就任した。同月21日、回復したカフェ・フィーリョが大統領職への復帰を望んだものの翌22日に議会は解任を決議した (Skidmore 2007: 156-157)。両者解任に際して議会は、内戦の危機が迫っているとの理由で弾劾手続きを簡素化し、短時間で解任を決議した (Dulles 1970: 46-58)。

両者の実質的排除は陸相のロト (Henrique Batista Duffles Teixeira Lott 1894-1984) 将軍 (当時) が陸軍部隊を動員して遂行した。正副大統領就任阻止を目論むルス大統領らの陰謀を確信した同将軍は、リオデジャネイロの陸軍部隊を動員し、政府機関やラジオ局、新聞社を占拠した。大統領を解任されたルスと閣僚、そしてラセルダ連邦下院議員 (1955-1960) はサンパウロでの政府樹立を企てて巡洋艦タマンダレ号に乗り込んだが、陸軍はタマンダレ号と海・空軍基地を包囲して降伏させた (Skidmore 2007: 154-155)。また同将軍らはラモス大統領に身を引かぬよう進言し、カフェ・フィーリョの自宅を包囲した (Dulles 1970: 56)。1956年

1月31日、正副大統領は予定通りに就任した。

ブラジル史ではおよそ、ロト将軍は正副大統領就任を阻止しようとするクーデタ計画から「民主主義を守った」英雄と評されている。だがカフェ・フィーリョの視点では、憲法規定に沿って昇格した副大統領を議会が締め出すクーデタに他ならなかった。その後、クビシェッキ大統領から文民政権が約8年間続くが、民主体制は度々クーデタの危機に直面する。

3. 1961年のクーデタ未遂

クビシェッキ政権 (1956-1961) は「50年の進歩を5年で」をスローガンに通信やエネルギーおよび道路の開発、新首都ブラジリア建設と遷都 (1960年) などナショナリズム色の強い大胆な経済計画を外資導入により推進して目覚ましい経済発展を遂げた。同時に財政赤字とインフレ悪化に苦しみ、同政権は38億ドルの負債を残した (Taffet 2007: 97)。

1960年の大統領選挙には、英雄ロト将軍とバロス元サンパウロ州知事 (1947-1951)、そして改革と腐敗政治の掃を掲げたクアドロス (Jânio da Silva Quadros 1917-1992) 元サンパウロ州知事 (1955-1959) が出馬した。その結果、クアドロスが大統領に、現職のゴラルが再び副大統領に当選して両者は1961年1月31日に就任した。クアドロスによる汚職追及姿勢や、ヴァルガス派ないし反ヴァルガス派のいずれにも属さないアウトサイダーの姿勢、サンパウロ市長 (1953-1955) 時代より発揮されてきた効率的な行政手腕は民衆に高く評価された (Skidmore 2007: 187-189)。同氏の汚職追及姿勢はすでに1954年の知事選で発揮され、汚職が噂された対抗馬バロスが攻勢にさらされた。2ヶ月後に連邦最高裁判所が撤回したものの、バロスは1956年にサンパウロ選挙裁判所の決定により投獄され評判を落とした (Mayer: インターネット資料)。

クアドロス大統領は米ソ対立と距離を置いて、市場拡大のため共産圏とも友好的な関係の維持を望む「独立外交」政策を模索して国民的支持を得た (Parker 1979: 12-13)。同国では外資依存が深刻化する中で、国内産業を大きく支配する米国への民衆の反発が高まっていたからである。しかし1961年8月25日に突如として同大統領は辞意を表明し、

実際に職を去った。就任後わずか7ヶ月で辞任した明確な理由は未だ不明であるが、1962年10月に政敵のバロスに破れたもののサンパウロ州知事選挙に出馬していることから政界引退の意図はなかったと思われる。アウトサイダーであるがゆえに組織的な支持基盤がなかったことなどから、辞任反対デモは小規模に留まった (Skidmore 2007: 207)。

ゴラール副大統領昇格に反発する軍部は、中国に外遊中のゴラールに対し国家安全保障を理由に帰国を禁止した。マジッリ (Pascoal Ranieri Mazzilli 1910-1975) 連邦下院議長が大統領を臨時代行するが、昇格阻止は軍部の総意ではなかったため内戦の危機に陥ってしまう。

昇格賛成の中心人物は第三軍管区司令官を務めるロベス (José Machado Lopes 1900-1990) 将軍 (当時) で、管轄区域はゴラルの故郷リオ・グランデ・ド・スル州に、司令部は州都ポルト・アレグレにあった。賛同した同州のプリゾーラ (Leonel de Moura Brizola 1922-2004) 知事 (1959-1963) はロベス将軍に対し軍部内ゴラール派の結束を駆り立てるとともに、民衆にクーデタへの抵抗を訴え、それがゴラール派のラジオ局により国中に伝えられた (Skidmore 2007: 210)。

ゴラール自身の経歴は国家に従属した労働組合などヴァルガスから受け継いだ連邦の制度に立脚していたため地域的な支持者を擁していなかったが、故郷ではヴァルガス派の同志が強固な政治基盤を築いており、ゴラルの昇格を熱烈に支持した。とりわけゴラルの妹と結婚したブラジル労働党のプリゾーラ知事は、州都ポルト・アレグレの市長 (1956-1958) も務めた地域的基盤の固い政治家であった (Bandeira 1979: 57)。軍部は、ゴラール昇格阻止に徹底して抵抗するプリゾーラ知事官邸の空爆を試み、同知事は州軍と民兵を動員して官邸に立てこもった (Dulles 1970: 150-151)。ゴラール昇格阻止を譲らない軍部三大臣と他の議員との対立が続く中、連邦議会は大統領制から議院内閣制に移行することで大統領権限を縮小してゴラールを昇格させるという妥協案に辿り着く (Dulles 1970: 146-147)。

ゴラールはマジッリ臨時大統領の命で送られたネーヴェス (Tancredo de Almeida Neves 1910-1985) 元大臣らとウルグアイで会談後、1961年9月1日に

故郷に帰国した。ネーヴェスとの密約通り、ゴラールを歓待した州民の前でゴラールは演説を見合わせた (Kuhn 2004: 81)。翌日、連邦議会在憲法修正を可決して議院内閣制に移行し、同月5日に首都ブラジリアに到着したゴラールが同月7日大統領に、ネーヴェスが首相に就任した (Skidmore 2007: 212)。就任後ゴラールは大統領制復活に注力し、1963年1月に実施された国民投票の結果、同国は大統領制に復帰した (Parker 1979: 32)。

ロベス将軍らの抵抗運動および議会による妥協案は、クーデタを回避した望ましいエピソードとして語り継がれた。他方、ゴラール昇格を当然と見ていたプリゾーラらには妥協案をのんだゴラールへの不満を残した。さらに、大統領制復活はゴラール派には当然の展開であったが、反ゴラール派には受け入れ難い状況を生み両者の対立は深まっていく。

4. 1964年のクーデタ

ゴラール政権は内部にも対立の火種を抱えた。ヴァルガスの伝統的な労働者政治に比べ、より急進的な政治目標を掲げる改革派の出現により、政権基盤となるはずの勢力内部に分裂が生じていたからである。プリゾーラ知事 (1959-1963) の指揮下でリオ・グランデ・ド・スル州では農地改革や初等教育拡大が州レベルで実践され、北東部ペルナンブーコ州ではアハエス (Miguel Arraes de Alencar 1916-2005) 知事 (1963-1964) が農業労働者の最低賃金制定および組合組織化の促進など独自の改革に着手した (Conniff 1999: 54-55)。従来の労働者政治が主に都市労働者に主眼を置いていたのに対し、プリゾーラやアハエスは農村労働者やその他あらゆる人々、すなわち民衆 (povo) に接近する。そして民衆の間にも社会変革を求める学生運動が活発化し、最も保守的な社会勢力と認識されていたカトリック教会内部でさえ青年部など急進的な活動が生じていた。

ゴラール大統領は「独立外交」路線の踏襲を試みたが、米ソ対立の深化と同国経済の米国国際開発庁を通じた借入金や融資への依存の高まりがそれを困難にする。とりわけ62年4月の首脳会談以来、ケネディ大統領に信頼を寄せるようになり、米国

の「進歩のための同盟 (The Alliance for Progress)」政策に傾く (Parker 1979: 18-22)。労働運動への「共産主義」浸透に強い懸念を示す米国側に対し、ゴラルは全て自分の指揮下にあるとケネディに請け負った (Parker 1979: 19) が、米国はゴラルを見限り独自に反共政策を推進していく。すなわちブリゾーラやアハエスなど改革派を「共産主義者」と見て、グアナバラ州 (1960年遷都以前の連邦区。1975年にリオデジャネイロ州と合併) ラセルダ知事 (1960-1965) など反ゴラル派の政治家に資金援助を集中させていく (Taffet 2007: 109-112)。なかでも米国の国際電信電話会社 (ITT) の子会社を1962年2月に収用したブリゾーラ知事は米国に敵視された (Leacock 1990: 117-119)。

ブリゾーラは1962年10月の選挙でラセルダが知事を務めるグアナバラ州より連邦下院議員に当選し、連邦議会に場を移して改革派の中心的役割を担っていく。1962年12月、米国はロバート・ケネディ司法長官を首都ブラジリアに派遣して「共産主義」勢力拡大に不快感を示した (Parker 1979: 31)。軍部の反ゴラル派は、改革の熱が高まるほど米国の反共政策と結束を深めていく。1963年1月、大統領制に復帰したことでゴラルが大統領の権力を回復すると、大統領に対し抜本的改革を求める改革派の圧力が一層高まる。改革案は「基盤改革 (Reforma de Base)」と呼ばれ、公益企業の民族化や農地改革の推進、無償教育拡大など多岐にわたる項目が含まれる政策パッケージであった (Fausto 1999: 267-268)。

経済政策の失敗とインフレ悪化も改革を求める熱気に拍車を掛ける (Fausto 1999: 273-274)。1963年11月、ケネディ大統領が暗殺されると、ゴラルの米国との心情的な結びつきも消えた (Parker 1979: 52)。1964年1月、在ブラジル米国大使の反発をよそに同大統領は議会を1962年に通過していた国外利潤送金制限法案に署名した。1964年3月13日、リオデジャネイロのセントラル駅前で改革派の大規模集會が開催された。勢いを増す改革派の支持をつなぎとめようと必死の大統領は、「基盤改革」実現の第一歩となる大統領令二つに演壇で署名した。一つは未だブラジル石油公社に組み込まれていない民間石油精製所の国有化、もう一つは農地改革のため休閑地の土地収用を定める大統領令で

あった (Fausto 1999: 275-276)。これによりゴラルの所有地の一部も収用される予定となった。

二つの大統領令署名を機に、カステロ・ブランコ (Humberto de Alencar Castelo Branco 1897-1967) 将軍ら軍部内穏健派や同国の「キューバ化」に怯える保守派中間層などもクーデタ計画に加わった。1964年3月19日にサンパウロ中心街では、カトリック教会保守派の女性団体主導で反共産主義の立場から大統領の辞任ないし弾劾を求める大規模デモ「神とともに自由を求める家族の行進」が実施された (Parker 1979: 63)。

1964年3月31日、米国の軍事的支援を得た軍部が決起した。グアナバラ州のラセルダ知事はもとより、ピント (José de Magalhães Pinto 1909-1996) ミナス・ジェライス州知事 (1961-1966) やサンパウロ州のパロス知事 (1963-1966) といった有力州知事からもクーデタを支持した。同年4月2日にマジッリが臨時大統領に就任し、ゴラルは内戦勃発を避け同月4日にウルグアイに亡命した。米国から武器や弾薬を積んだ軍艦および軍用機と空母フォレストルがサンパウロ州のサントス港に向けて同月11日到着予定で出発しており追加支援も予定されていたが、到着を待たずにクーデタは完了した (Parker 1979: 72-87)。同月9日、軍政令第一号によりゴラルやブリゾーラ、クアドロス元大統領ら改革派の公職権が停止され、同月15日にカステロ・ブランコ将軍が大統領に就任して軍政が始まった。リオ・グランデ・ド・スル州にて抵抗を試みたブリゾーラも同月末に亡命した。同年6月にはクビシェッキ元大統領やクーデタに加わったパロス知事なども公職権を停止され、多くが亡命した。

1964年のクーデタは、ゴラル就任当初から反改革派への米国の支援により着々と準備され、ゴラル派の抵抗を想定した軍事支援も用意されていた。クーデタに加担した人々の思惑に反して軍部は長期に渡って権力を掌握し、改革派のみならず全ての人の権利を抑圧することになる。不都合な議員を排除した議会では形式的な二大政党制が維持された。体制に不都合な人々への弾圧が続く中、ルセフ元大統領も反政府ゲリラ組織に参加して処罰を受けた若者の一人であった。

おわりに

本文で振り返ったクーデタやクーデタ未遂は弾劾をその手段として用いながら、一方が「望ましくない」大統領から「然るべき」民主主義を取り戻そうとする試みであった。都市労働者の保護に始まり、農業労働者の保護や教育の拡大、農地改革といった支配構造の抜本的変革を意図する政策の是非が対立の軸となっていた。いずれの立場も軍部の政治への介入という選択肢を保有していた。

「民主主義を守る」ためのクーデタという病と、それを繰り返したくないという想いは、以上のような経験的知見を通じて理解されるものであろう。弾劾賛成派はルセフ大統領から「然るべき」民主主義を取り戻したことに歓喜した。「汚職」がすでに明るみに出ていたならば2014年に再選を果たさ

なかったはずだと主張し、弾劾により過去の選挙結果を覆すことに成功した。弾劾反対派にすれば、弾劾は13年間続いていた長期左派政権の強引な幕引きであり、クーデタに他ならなかった。

クーデタの再来を危惧する人々は何より、ついに定着したと思われていた民主主義がかつてのような脆さを露呈して衝撃を受けたのではないか。ルセフ大統領の弾劾は、軍部の協力を必要とせずに遂行された点でかつてのクーデタとは異なる。それでも、ロト將軍やロベス將軍のような国民的人気を誇る軍人が不在であるにも関わらず、軍部の政治介入を求める声は存在する。その後、軍事政権復活を求める極右勢力が下院占拠を試みる(2016年11月)等、民主主義に対する挑戦はさらに激しさを増している。

【参考文献】

- 住田育法. 2011. 「軍政下ブラジルの記録映画に描かれたヴァルガスのカリスマ性」(『京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所紀要』第11号)、119-135ページ。
- Bandeira, Moniz. 1979. *Brizola e o Trabalhismo*, 2ª ed. (Rio de Janeiro: Civilização Brasileira).
- Café Filho, João. 1966. *Do sindicato ao catete: memórias políticas e confissões humanas*, v. 1 Do sindicato ao catete (Rio de Janeiro: Livraria José Olympio Editora).
- Conniff, Michael L. (ed.) 1999. *Populism in Latin America* (Tuscaloosa, Alabama: The University of Alabama Press).
- Dulles, John W. F. 1970. *Unrest in Brazil: Political-Military Crises 1955-1964* (Austin: University of Texas Press).
- Fausto, Boris. 1999. *A Concise History of Brazil*, Arthur Brakel (trans.), (Cambridge: Cambridge University Press).
- Kuhn, Dione. 2004. *Brizola: da legalidade ao exílio* (Porto Alegre, RS: RBS Publicações).
- Leacock, Ruth. 1990. *Requiem for Revolution: The United States and Brazil, 1961-1969* (Kent, Ohio: The Kent State University Press).
- Parker, Phyllis R. 1979. *Brazil and the Quiet Intervention, 1964*, Texas Pan American Series (Austin: University of Texas Press).
- Rose, R. S. 2000. *One of the Forgotten Things: Getúlio Vargas and Brazilian Social Control, 1930-1964* (Westport, CT: Greenwood Press).
- Skidmore, Thomas E. 2007. *Politics in Brazil 1930-1964: An Experiment in Democracy*, first published in 1967, 40th anniversary edition (NY: Oxford University Press).
- Taffet, Jeffrey F. 2007. *Foreign Aid as Foreign Policy: The Alliance for Progress in Latin America* (NY: Routledge).

[インターネット資料]

- Keller, Vilma. <http://www.fgv.br/cpdoc/acervo/dicionarios/verbete-biografico/joao-cafe-filho> (最終アクセス日: 2017年8月6日)
- Mayer, Jorge Miguel. <http://www.fgv.br/cpdoc/acervo/dicionarios/verbete-biografico/ademar-pereira-de-barros> (最終アクセス日: 2017年8月8日)

(本研究員)